スポーツの社会が実社会の有用性に及ぼす効果について

竹　内　敬　業

スポーツとは

スポーツの意味

「スポーツ」とはそもそもいかなる語であり，いかなる意味をもっているのであろうか，スポーツ(sports)の字義的な解釈，語源的な分析によると，スポーツはラテン語では，これを desportare といい，dis は away を，portare は to carry を意味し，to carry away 運び去るとか，夢中になることを指している。またフランス語では，disporter あるいは deporte で仕事から離れること，即ち遊び楽しむことである。また英国の古語では disport といい，楽しむ，気晴らしをすることであった。したがって言葉のもとの意味は，各国とも本来の仕事から転ずること，気晴らしとか娯楽，即ち「日常の仕事から離れて自由に楽しむ」の意で娯楽や遊戯のことを指していたようである。したがって，これらの言葉はラテン語―フランス語―英語と転化して競技を意味する sports として広まったものと考えられている。しかし，古代においてはスポーツという言葉が発生する前にすでに古代オリンピックを始め，数多くの競技会なるものがあったが，それは祭典のための競技であってスポーツではなく，つまりアゴニーズ（生命をかけて死闘する）であった。

スポーツは人間だけがもつ唯一の文化だと言われる。しかし，人間の行動がただ本能的に行われているうちはスポーツとは言えないのである。例えば，猟物を追って走ったり，猛獣に追われて川をとび越したり，果物を取ろうと木によじ登ったり，トナカイを見つけて投石したり，相手と組み打ちをして突き倒したり突き倒されたりしてきたことは，古代人がただ生活の過程において生きることが主目的な行為であってその副産物として，スポーツ的な素地が生れつつあったというに過ぎないことであった。

しかし，時代の変遷と共に，人間本来の競争心というものは必然的に一定の規則をもうけ，その規則によって人間相互の競争が行われ，しだいに競技運動へと進展してきたのである。そして，その内容たるや実に多種目にわたり現今に見られるオリンピックの如く，その普及発展は今や全世界におよび実に驚異的なものとなって広まってきたのである。

スポーツ再興の秋

戦前のスポーツの歩みを省察するにどちらかといえば勝利至上主義に傾き，それがために技術の向上のみに専念し，記録の面においては大いに伸び，種目によっては世界的水準にまで到達し得たけれども，スポーツの内面的考察は軽視されなおざりにされた結果，スポーツの本質というものが一向に理解されず，ややもすれば本道をはずれ不快な事件の場を引き起し，むしろ技術面よりも重視せねばならないスポーツマンシップ(sportsmanship)，フェアープレイ（fairplay）はきわめて低調に推移されていったのである。

わが国としても戦後を契機として，スポーツの在り方，行い方について再検討を加え，過去の誤りを正し，正しいスポーツの在り方に立脚し，技術面の向上と共に，とかくなおざりにしてきたスポーツの道義心の高揚に，運営の合理化に，正しいスポーツの指導に，健全で明るいスポーツ再興の育成を目指して真剣にとりくんでいくべき時機であろうと思う。

一方，外国の事例をみても長い歴史の間には種々の弊害が起り苦慮した時代も多々あったようだが，関係者の良識と英断とによってこれを打破し遂に今日の如く輝かしいスポーツ黄金時代を出現させている国々も少なくないのである。

わが国のスポーツ界にあっても，終戦後の混乱期は一応脱却し軌道に乗ってはきておるが，未だ改善を要する事態も少なくないと思われるので速かにこれらの改善を加え，正しいスポーツ精神を堅持した歩みをするようにつとめねばならない秋であると思われる。

スポーツの重要性

現今の社会を眺めると，老若男女を問わず至る所で，特に子供達はちよっとの空地を利用してスポーツに興じ楽しそうに遊んでいる。何故にこんなにまでスポーツには我々をして夢中にさせる魅力があるのだろうか。実際スポーツをやってみると面白い，楽しい，満足感が湧く。この強い内面的な要求によって引きつけられるこの欲求を満足させることによって，無上の愉悦を味うことができるのであろう。結局，われわれに実践を通して歓喜をあたえ，その代償として人間生活にとって必須条件である「心身の健全なる育成」が養成されていく。したがって，スポーツを行う場合には適当な方法で，適度にスポーツ欲を充たすことにより，それ自体が歓喜となり愉悦となり，その上活動を通して心身発育期のものはその発育が助長され，特に青少年の場合には一般体格又は生理学的関係上から考え，大体15・6才頃から徐々に強い運動に移り，18・9才に至って強度の運動を実践することが合理的である。この成熟期直前からが大切であってスポーツの効果を上げ得る為にも最も重要な時期であり，また生涯の我々の体格が殆んどこの期間において決定されると考えてもよいであろう。この意味において，高校・大学生時代の体育スポーツの運営・指導方法は重大であり，指導者の果す役割もまた実に重かつ大と言わなければならない。

次に成人・壮年群の運動方法はすでにでき上っている各人の体型質を維持すると共に，更に進んで能力を発揮し得るように鍛錬を怠らぬことが肝要である。

わが国の現状では，成人後にスポーツ，体育運動を続ける人は甚だ少ないが，運動不足は早老を招き，その結果災害の原因，病気に対しては抵抗力が弱く，所謂，体がかたく，きかない身体になってしまうので，体操・スポーツ等は終生行うべきものであって，個人個人の健康保持上からも自主的にたゆまぬ努力を続けて行くべきである。

ここで，ルー（Roux）の三法則について考えてみよう。

発育過程中にある児童生徒，学生，並びに一般成人の場合にも同様であるが，運動を行う場合，また指導をする場合には，生物学的原則に立脚し間違いのない正しい方法で実施しなければかえって逆効果を招く恐れも生ずるため十分に注意して合理的に行なわなければならない。

ルー（Roux）の三法則

(A) 身体は使わなければ弱くやせていく。（不能動性萎縮）

(B) 適度に使用すれば現状を維持し更に増強していく。（能動性発達）

(C)　過度に使用した場合には障害をうける。（過能動性萎縮）

以上の法則中で特に(B)の場合は体育並びにスポーツの指導に当っては極めて重視さるべきものである。今この原則に照らして，日常生活における仕事及びスポーツを「動きの範囲」という点から考えてみると，何れも過能動性萎縮又は不能動性萎縮を招来し，その可動範囲は著しく縮小されていることに気付くであろう。しかるに，徒手体操は，人間が本来具有する可動性に基き身体各部を極限まで動かすことが要求されるから，その運動領域は最大となり，失われた柔軟性は再び得られることになる。

（注）　有機体は活動によって筋肉細胞は，筋肉繊維がたてに分裂してその数を増すために太くなる。活動がなくなると，筋繊維は融合するので，筋肉は細くなる。だから高度に練習をつんだ筋肉は，活動によって筋肉細胞に対する筋繊維の割合が極大となる。

しかし現今の我々の日常生活を考えると，非体育的な文化生活の影響により，一般に原則の(A)・(C)項，即ち不・過能動性萎縮に陥り，次のような状態を呈しているのである。

(1)　関節は硬直している……身体が凝固硬化して可動性を失っている

(2)　筋肉は薄弱である……筋肉の発育が不十分で力が欠乏している

(3)　神経が鈍重になっている……身体が意志のままに自由に動かず，不器用になっている

この三点は一般健康者といえども，程度の差こそあれ各年令に応じて有する所の共通的な欠陥である。これらの欠陥に対し補償矯正し，更に向上せしめて行くのが徒手体操，スポーツであって，これによって硬直を柔軟に，薄弱な筋肉を強靱に，不器用を巧緻に転化させることができる。

また身体は自然環境，食物，身体運動等の影響によって漸次馴化し，対応し変化していく特性がある。現今の生活状況をみると，自然と遊離し，公害に悩まされ，健康の保持増進に欠くことのできない「歩く」ことさえ文明の利器の異常な発達と，高度成長の影響をうけて激減し，自然のうちに偏頗な生活を余儀なくされ，ために健康が著しく破壊され今や国をあげて体位低下の招来に対する対策が猛省されている。しかしながらこの危機を救う道は身体運動（大筋群活動）に待つより他にないであろう。身体運動によって適度な刺戟を反覆与えることによって，健全な肉体を獲得することができる。また合理的且つ合目的々な鍛錬により極めて円満に調和的な身体の育成も可能となり筋肉は勿論，皮膚，内臓諸器官，五官器等すべて刺戟によって発達は促され機能の向上をはかることができるのである。

スポーツマンの態度（あり方）

スポーツを行う者の態度としては，スポーツそのものを真に愛好して行う，つまりスポーツに陶酔する態度が望ましい。各人がこのような精神で行う場合にはスポーツそのものが和やかな雰囲気に包まれることになり，観覧者をも楽しませてくれることになるだろう。しかるに，これまでのスポーツマンの精神，態度というものは，とかく勝利第一主義に徹し過ぎただ勝つためにのみ奔走し，ときには己を犠牲にしてまで練習に終始し，ややもすればスポーツの本質を忘れがちな行為が少なくなかったのであるが，今後はより明朗で愉快な気分を保持しながら行うよう一歩一歩前進して行かなければならない。

しかしながら，多くのスポーツが試合形体をとる以上最終目標においては勝敗を度外視するわけにはいかない。勝敗を考えない競技は，ただ単なる身体練習であり，遊戯であって厳格な意味での競技又は試合とはおのずから区別されるべきものである。しかし，お互に勝敗

を目指して敢闘し合う過程の中で，一方のチームはなにがなんでも勝たねばならぬと勝利の奴隷のような態度をとるのに対し，他方のチームは終始楽しみながら正々堂々と健闘する。この両者の場合，長い伝統の教訓，技術の相違，また指導者の考え等微妙な要求にもとずくこともあり得るだろうが，多くの場合スポーツに対する考察力が問題となって現われがちであるということが言えるだろう。

国際試合などを見ても，勝利至上主義を露骨に表わすチームなどは，とかくスポーツ歴も浅くスポーツ教育が十分培われていない国が多いようである。このような点もスポーツのあり方として充分反省を加え，国際親善に大きく寄与するものは「先ずスポーツから」をモットーに自負心をもって努力すべきである。

考えてみれば，何故にこんな厄介といえば厄介なスポーツに対し，我々人間は強烈に興味を引かれ熱中させられてしまうのだろうか。技倆が伯仲した大会等では，熱が入れば入る程，競技者は勿論ファンも我を忘れて興奮する。その内に一方のチームが不利にでもなって来ると怒号や弥次を連発，ときには殺気立ったファンのため試合の一時中止というような最悪の事態も起り，実に不愉快な幕切れとなることも少なくない。このような場においてはスポーツの期待されている所期の効果というものは決して望めないし生れてもこない。スポーツが広く大衆から愛され歓迎されるためには，一にスポーツマンの毅然たる態度と誠実さが重要であり，個人に課せられる責任と行動は実に重大であり，一人でも多く真のスポーツマンになることを強く望むものである。

また「ファインプレーを勝利の上に」という標語がある如く，スポーツマンはいついかなる「場」においても，例えば日常生活の行動中にも，勿論競技大会においても，いつも正々堂々と率先遂行すべく精進を続けなければならない。この字句は言葉ではいとも安易であるが，いざ実践の場において忠実に励行するとなると甚だ難しいことと思う，がしかし深く肝に銘じて実行してほしいと思う。

また試合に付随してよく耳にする言葉に，「勝ったか」，「負けたか」という対話を聞く。競技者の競技精神から発する場合には，「如何に戦ったか，そしてその結果はどうであったか」と聞くべきである。しかし，実際問題としては大衆が先ず発する言葉は，「勝ったか」であり，「勝った」と言えば喜び，「負けた」と言えば後は何も語らずに不機嫌な顔で去って行く。このようにまだまだスポーツのあり方において勝敗に対する意識のみが強いのである。例えば英国から輸入された，ラグビー，テニス等はスポーツ精神を絶対遵守する伝統があり，米国から入って来た野球においては，あくまでも勝ての気風が強く浸透している。このように多数の種目，ルールの相違等により，競技者の性格も行為の過程において変って行くのは如何ともしがたい事実かもしれないが，その精神は十分尊重されて行なわれなければならないことに変りはない。

（注） アメリカ人とイギリス人の気性について付記する。一般的に英国人の主張は勝負の結果も大切ではあるが，要はその過程を貫く精神如何にあるという明確な前提がある。

一方，米国人はスポーツ精神はもとより大切ではあるが，勝負である以上，勝つことが最大条件である。両者ともにスポーツ精神を尊重することに変りはないが，英国人はこれを絶対と考え米国人はその上に勝つことを絶対とする考えである。この両国の影響は我が国のスポーツにもはっきりと現われている。

英国よりのラグビー，テニス等はスポーツ精神を絶対とする伝統があり，渡米の野球にはあくまでも勝ての気風が強い。勿論野球でもスポーツ精神尊重が説かれてはいるが，日本も敗戦後は特にアメリカの影響力が強く作用し，スポーツは先ず勝つことを第一条件とする主張が強くなってきていることは事実である。

とくに学生，生徒にとって「学校という場」における主たる任務は，知的追求を目指しての勉学であり，その結果高尚な態度，冷静沈着な精神，深く正しい見解，教養等を身につけ知識の高揚が得られるが，徳性と知識とは異るものである。良識と良心とは違うものであると言われているように，知的追求のみでは真の社会的，道徳的精神というものは涵養されない。これらは社会生活の行為を通して育てられ培われていくものである。大学における体育は正課の教科目としては唯一の行動の科目である。従って，授業において行われる教材は社会的，道徳的精神の涵養に役立つ種目が選ばれ実施されることが望ましく，とくに団体的スポーツはその主旨に沿った理想的な種目である。

また，善良な一般公民の育成を目指す教育方法も多々あると思われるが，有効な実践の一つとして，先ずスポーツを取り上げたいと考える。即ちスポーツの実践を通して公民に欠くことのできない性格，徳性を練成することである。その理由としては，スポーツは極めて大衆的であり，特に日本人の性格によくマッチでき，自主的行動が取れ，社会の殆んど各層の人々によって容易に実行され得る可能性を包含している点である。例えばそれが如何に高度で理想的な方法であるとしても，一般人の理解と自主的態度が得られないものでは問題にならない。この点大衆をして積極的に参加させ得るスポーツはまことに理想的といわなければならない。第二の理由は，スポーツの社会，スポーツの場の様相というものがそのまま実際の社会生活の縮図であると考えられる点である。即ちスポーツの社会は実社会の生活からは一応離れ理想的な社会型態を形成するのにマッチした型であるが故に，この理想的なスポーツ社会が，そのまま実社会に反映され，随処で実践行為として個人個人が発揮できるよう育成することが肝要であると考える。

スポーツマンシップ

スポーツマンシップとは？。これについては多くの人々が種々の立場で述べられているが，ここでは代表的なものをあげて考えてみよう。

ヘンリーカーチス (Henry Curtis)

プレイによる教育の著者は次のように述べている。

「スポーツマンシップは原始的な道徳である。それはあなたに次のことを注文する。あなたはフェアー(fair) にやらなければならない。あなたは勝つためにベストを試みよ。自分の方が不利ならば一層奮闘せよ。しかし負けたならば笑顔をもってこれを承認し，次回に再び試みるつもりで帰って来い。審判員の判定を承認し，負けたからといって相手の名を呼び又は石を投げて復讐を図ってはいけない。来戦のティームは賓客として待遇し，地位の有利があればこれを彼等にも与えよ。このような行為及び公的行動というものは最も基本的な教訓であって，よろしく児童，生徒の学ぶべきものであり，スポーツマンシップのみを養うためにも，プレーを学校の科目に入れる価値は十分あると考える」（下田次郎氏）

ヨスト氏 (Fielding H. Yost) はスポーツマンシップについて次の如く述べている。

「スポーツマンシップということは煎じつめると，Respect という事に帰する。試合の相

手を尊敬する。試合の規則を尊重する。審判員を尊敬する等々。つまり尊重するということが基本である。相手を尊重すればこそ，これと均等の条件の下でフェアに戦うのである。規則を尊重するゆえに，審判員を尊敬するゆえにこそ，これに絶対に服従するのである。更にこれを約していえば，自分の行いつつあるゲームそのものを尊重することになる。試合を尊重するゆえに相手を尊重し，規則を尊重しあくまで全力を尽して戦うことになるのである」という。

シーフェリン中佐（進駐軍の中佐）の説

我々の運動競技においてはスポーツマンシップがあり，所謂これは運動競技における武士道にあたるものである。そしてスポーツマンシップの第一の重大な要素は，フェアープレーをすることである。

アメリカの少年達はでき得るだけ各競技に上手になろうとすると同時に，規則にしたがって競技しようと努め，競技中ずるいことをするのは軽蔑すべきことと看做されている。そしてフェアープレーの原則は一生涯を通じて，即ち商業でも，自由職業でも，家庭においても，学校においても，ひいては政治においても変らない。それは正直，気品，紳士道を意味し，これがフェアープレーの本質である。競技者は規則をよく理解し規則に従って競技をし，競技は自分の全能力を発揮して一生懸命にする。

スポーツマンシップの第二の重要な要素は，よい負け手となることである。私の聞いている日本の習慣とは反対に，米国では公正に競技を行って全力を尽したならば，たとえ負けても恥にはならない。日本では負けたティームの選手や，陸上競技に優勝しなかった選手は，勝たなかったという理由で自分自身も恥をかき，学校に対しても不名誉なことをしたと思う，と私は聞いている。ところが米国ではそんなふうには考えない。負けたからとて恥とか不名誉だとは決して思わない。勿論勝ちたいし，又勝とうと頑張るがもしも勝てなかったのは不運のためだ。そしてスポーツマンシップはきれいに負ける者（Good loser）たることを求める。この奇麗に負ける者とは，心の中の負けた苦痛を外に現わさないで快く勝った相手を祝う人だ。その反対にスポーツマンシップに欠けている者は負けたことに対して憤を表わし，勝者が自分より上手であるとか，強いということをなかなか認めない。だから負けて恥をかいたと思うのである。このような人を負けおしみの強い者と称して吾々の社会からは侮辱される。全力を尽し公正に試合をしたのであれば負けたからといって悪く思う必要は全然ないのが真実である。勝った者も真の運動家なら，負けた相手の努力と演技の如何に対してそれ相当な敬意をはらうことに全力を尽す。若し試合の相手が，ずるい事をしたり，規則に違反したり，不正をやったりしたならば，即ちスポーツマンシップの理想に反したならば勝敗の如何に拘らず軽蔑される。そして米国の運動界ではこのような人は警告を受け，尚も改めない時にはどんな競技でも参加できないようになる」という。

大谷武一氏（元東京高体専門校長）はスポーツマンシップについて次の如く述べられている。

「スポーツマンシップはスポーツマンの共有する行動に関する一種の基準で，スポーツマンたることによって自然に体得されるところのものである。公正の精神，即ち競技は一定の規約に基づいて行われるため，スポーツを愛好するものとしては自然的にその運動を支配する規約を忠実に守ることになる。その規約の精神は公正の精神である。総ての競技は同じ基

準に立って同じ条件の下で競技せんとするものである。そのため競技を愛好する者は，その精神をくんで公正に競技し，かりそめにも規約を犯したりもぐったりすることはしない。このかりそめにも不当な利得を取らないで相手に公平な配分を与えて，同一の基準のもとに競技するというこの公正な競技精神こそはスポーツマンシップの核心とも称すべきもので最も代表的な徳目の一つと思惟されている。ベストを尽す。総ての競技は身心の力を極度に発揮して，その速さ，強さ，巧緻さなどを競うものであるから，心から競技を好むスポーツマンは必ず競技の際には常に己をつくし，最善を尽すに違いない。

相手を信ずる。競技には必ず相手が予想される。その相手は同好の士であり，感謝すべき仲間である。そして相手は自分にスポーツを行わせてくれる恩人である。スポーツマンは相手の人格を信頼し，更に相手を信頼する美徳をスポーツを通して修得する。このようにスポーツを愛好することから，自ら体得するフェアープレー，ベストをつくす，相手を信ずる，という顕著な特質がスポーツマンシップの内容を構成する」という。

以上の諸意見から，スポーツマンシップとはどんな内容をもち，またどんな心掛けで行動にうつすべきかが明らかになったことと思う。ただしこの精神も，人により，国によってその内容，考え方において必ずしも同一とはいえない。しかしスポーツマンシップはスポーツマンたる者が堅持すべき徳性，或は精神的態度であることに変りはないのである。その内容としては，公明正大，遵法の精神，相手を尊重する，ベストを尽す，良き勝者・敗者たるの精神，勇気，協同，忍耐力，服従，克己心，誠忠，犠牲心，自他共栄等々の精神が含まれている。これらの諸徳性はただスポーツマンが，スポーツの場においてだけ尊重されるべきものであっては，さほど影響が強いとは考えられないが，これが実社会の場において，時と所を問わず我々大衆が常時行動に現わすことができた場合，その成果はまことに大となり得るのである。これがスポーツを通しての「公民の道徳」であると信ずる。

またスポーツは極めて民主的で楽しい競技である。このスポーツを通して国民により高い競技道徳，スポーツマンシップ，フェアープレイ等を体得させ，正しい明るい善良な公民の育成に努力すべきで，スポーツ教育（保健・体育）の使命は重大であるといわなければならない。

次にスポーツマンシップが発揚され，美徳として賞賛され，ながく歴史上に残り，スポーツマンの鑑となっている人々について述べてみよう。

スポーツの母国といわれる英国においては，スポーツマンシップ，フェアープレイの精神は，スポーツの社会では勿論のこと，これが国民大衆の日常生活の中に深く反映され生かされている。

そのⅠ　第一次世界大戦（少々昔の話しではあるが）の初期，英国議会において，時の首相アスキスと反対党首領ボナーローとの挨拶の交換である。ボナーローは，「議会の初めに当って一言誤解を除いておきたいことがあります。新聞紙上や友人の話で承知いたした事でありますが，政府と反対党との関係について一つの誤解があるようです。即ち，政府は吾々に戦争に関する諸計画を通知せらるるところから，吾々もある程度において，政府と責任を分つものであり，従って充分な批評の自由がないという誤解です。私はこの誤解が政府のせいでないということを良く知っている。又私が政府の通知が不充分だとて苦情をいうどころでないことは諸君は御了解であろう。ただ私は戦争方法に関する責任は政府のみが負うべき

ものである。吾々反対党には何等責任がない。吾々反対党は絶対に自由である。吾々はただ国家の利益であると信ずるところに従って，或は政府の行動を批評し，或はその批評をさし控えるのみであるということを明らかにしておきたい。今会期は必ず議論百出であろう。そして批評はこの際最も必要なことである。ただ吾々は目下の時局頗る重大なるが故に，この議席より起るべき批評は党派の利益に少しも支配せられざるものなることも私自身のため，又吾が党の士のために一言しておかんと欲するものである」と述べた。

これに対し首相アスキスは次の如く述べている。「貴紳士の述べられたところ極めて同感である。国家の政策及び陸海軍の行動について責任を負うべきは陛下の政府のみである。私は決して責任を逃れ又は分たんとするものではない。また公明正大にして愛国的な批評は，何時なりとも何人たりとも，あえて辞する所でない。外交その他の事項について，政府が受取る通信の大部分を日々反対党首領に伝達いたしましたのは，それが正当適宜なりと信じたが故であって，決して吾々の過去及び将来の行動に対する批評の自由を束縛するものではない。反対党諸名士が政府の負担せる諸調査，殊に微妙なる経済問題に関して与えられたる精神において，愛国的価値において，無量なる御協力に対してはあらゆる感謝の言葉を捧げたいと思いますが，しかし諸君がブリテンの政治家として公明正大なる御協力を与えられたりとの事実が，政府が自己の責任をもってする行動に対する諸君の判断，批判を制限する意味に取らるべからざることは勿論である。今や空前の責任と，末曽有の心配とが眼前に山積するに当り，政府は充分なる御批判を歓迎し，且つ全衆議院の御協力を得んことを信じております。」（穂積博士「運動家精神より」）

かくの如く政治上の争にも，公議の場においても，スポーツ精神を発揚し公明正大であることが，スポーツ国英国の誇りであろう。願わくは我が国会においても，真のスポーツマンシップを誇り得る，明朗な政治家の多数出現されんことを期待するものである。

そのⅡ　米国ルーズベルト大統領の競技精神。スポーツ王国米国においても，スポーツマンシップは社会生活の中に生きている。ルーズベスト大統領は1895年，アメリカンフットボールが世論の攻撃の焦点に立った時，ニューヨークのハーバード倶楽部で「余は競技を愛す。余は蹴球を愛す」という名演説を行った。そして「人生はフットボールだ。最上の戦術は前衛戦に真正面から打つ突かることだ。不正をやるな，小策をろうするな，真正面からただ打つ突かれ」と。（岡部平太氏「スポーツ行脚」）

これはルーズベルト大統領の人生観であって政策上の主義でもあっただろう。このように政治上にもフェアープレイ，スポーツマンシップの本流は流れている。

そのⅢ　これも米国で起った商業上のスポーツマンシップの現わされたできごとである。日本の商店と先方の商店が取引を行った際，少々話が面倒になってきた。この時交渉に当った日本の商人が，たまたま庭球か，ゴルフのスポーツマンであったことが先方に何かの拍子に知れたらしかった。そのため先方の態度が急に変り縺れた難題がすらすらと解決したということである。即ち相手はこちらがスポーツマンであると知って，無条件でこちらを信頼してくれたのである。真のスポーツマンは人を信ずることができるし，また他人からの信頼を裏切るようなことはあえてしないだろう。日本においては古来より「武士の一言」という気持は確かに真のスポーツマンの中に窺うことができる。（大谷武一氏「体育とスポーツの諸問題」）

その Ⅳ　スタック教授のスポーツマンシップ

スタッグ氏は，1862年8月16日ニュージャージー州ウエスト・オレンジに生れた。母は幼少の時亡くなり父は靴の修繕業で貧困であった。しかし極めて正直で正邪の判断が正しく勇気があった。彼の性格は父系，母系からうけ剛毅で純情で粘り強く忍耐性があった。彼は運動好きで小学校時代水泳とスケートを覚えた。野球も好きでカーブを投げることも覚えた。身体は大きく頑健であった。18才のときオレンヂの高等学校に入り野球の投手となった。彼は地方選手として相当名声を博した。当時副校長，シャーマンの奨めでエール大学に入ることに決心したが，今までの不規則な勉強のため，エール入学のできないことを考え，フィリップエクスター専門学校に入った。彼はここで家庭労働をしながら勉学した。その後好くエールの神学部に転学することができた。ここで彼は天性を野球，蹴球において十分に実力を発揮した。そして断然学生野球界の花形となりエールの至宝投手として4年間選手権を続けた。卒業後は大学院に入り，Y.M.C.Aの事務主任になった。ここで蹴球部に入りエール全勝の記録を作り，彼は全米模範代表ティームの中に選ばれた。

1891年スプリングフィールドのY.M.C.Aカレッジの一職員となった。翌1892年恩師ハーバー博士がシカゴ大学創立の総長となったためここの体育部長として呼ばれた。ここにおいて彼は生涯をシカゴのグランドに捧げた。明朗にして健実，高潔な彼の人格は学生に一種の気骨を与えた。彼は競技を教えると共に，それにも増して精神を教えた。

シカゴ大学のグラウンドはもと寄贈者，マーシャルフィールドと呼ばれたが，1914年大学評議員会の投票で全会一致スタッグフィールドと呼ぶ事に決し，彼の名を永遠に伝えている。この米国競技界の偉大なる体育者，スタッグ氏のスポーツマンシップについては多々あるが，その中の一つを次にあげよう。

この実話は大谷武一氏が，シカゴ大学留学中の出来事で同氏著「体育の諸問題」に掲げられたものである。

スタッグ氏は自分の仕立てた選手をつれて付近の大学へ蹴球の試合に出掛けた。相手の大学は蹴球で有名のため，シカゴ軍には初めから旗色が悪かった。彼はスタンドの一隅からシカゴ軍の一進一退に悲喜こもごもしながら熱心にこの試合を眺めていた。シカゴ軍はますます振わなくなってきた。ペーゲ主将の顔色はだんだんくもって来た。この時幸か不幸か審判員が決定を誤って，シカゴ軍に有利な決定を与えた。しかしこれが誤審であることを誰も気付かなかった。このためシカゴ軍の前途に一道の光明が閃めいた。選手の意気は再びあがった。この光景を見ていたスタッグ氏はこの時審判に抗議を申し込んだ。ページキャプテンは彼に哀訴した。どうぞ黙っていて下さい。そうすれば吾々は勝てるかも知れないからと哀願したが，彼は断固これを斥け自分の所信を主張した。審判員も彼の主張が正しかったのでこれを容れ，前の決定を取消したので，シカゴ軍の望みは消え大敗したということである。

試合は白熱すればする程，プレーヤの動きも活発になり，そのため反則も多発し，審判員としてはいかに真剣になってやっても，ミスを起し易くなりがちである。

ここでスタッグ氏のとった態度は，スポーツマンとしてはあたりまえと言えば，あたりまえのことであった，がしかしこの場において味方が不利でこのままで行けば負けるかも分らないという時，監督の立場で毅然として立ち審判に抗議を申し込んで，スポーツマンシップを発揚した彼は実に非凡であり，一般の者にはなかなか真似のできない，永遠に歴史に残る

美談であると共に権化である。

そのⅤ　次は日本人が世界の檜舞台において，スポーツマンシップを発揮した美談をあげてみよう。

(A)　清水善造選手のフェアープレイ

1920年の6月，英国のウイムブルトン庭球大会における，シングルス日米対抗決勝戦の時のことである。我が清水善造選手は当時世界一の定評ある米国の，チルデン選手と顔を合せた。初陣の我が清水選手はすぐにも一蹴されるだろうと予想されていたが，予想に反し第一，第二，第三セットとリードした。しかしチルデン選手はその後盛り返して大熱戦となり結果は清水選手は惜敗した。この大熱戦の際清水選手の打ったボールが，チルデン選手は危く打ち返したが，そのためにひょろひょろと転倒してしまった。この時清水選手は確実に一点を取ることが出来たのであるが，これを見た同氏はこの虚に乗ずることを潔とせず，やさしいボールを返して彼の立ち直る余裕を与え再び大接戦を続けた。この息づまる熱戦を見ていた大観衆は清水選手のこの立派な態度に感激した。そしてこの試合には敗れたが，そのスポーツマンシップは永く外人の賞讃の的となった。試合の翌日ロンドンタイムス紙は清水選手のプレー振りを次の如く論述した。「この立派なプレイヤー清水善造選手をウインブルトンに送った日本は，数十名のよい外交官を送ったより日本を紹介するに効果があった。日本政府はこのプレイヤーに何をもって報ゆるであろうか，もし英国であるならば，彼に最高の文化勲章を授けるであろう。」と結論した。

(B)　竹中選手の力走

これは1932年ロスアンゼルスの第10回オリンピック大会の時のことである。5千米競争に出場した我が竹中選手は一着よりも一周も遅れたが，最後までレースを捨てずに頑張って走った。そして競走中自分が入賞圏内から外れたことを知るや，レコードを作るべく1・2着を争った，フィンランドのレーチネン，米国のヒル選手に第一コースを避けてやった。この竹中選手のフエアープレイを見た観衆は彼が最後の一周を力走したとき，彼の走るにつれて熱狂した観衆の拍手はぐるぐるスタンドを一周した。この竹中選手の立派なスポーツマンシップと，観衆の美しい態度は大会随一の熱狂的のものであったといわれる。

(C)　城戸少佐のフェアープレイ

これも第10回オリンピック大会において，我が馬術競技の選手，城戸少佐によって立てられた立派なスポーツマンシップである。

昭和7年8月12日，コース25哩の野外騎乗に出場した城戸少佐の愛馬，「久軍」は走り，飛び，各種の障害をすらすらと征服して35番目の高障害，最後の難関ダブルジャンプの前に来た。この時愛馬「久軍」は最早や疲れて進むこと能わず苦しそうに喘いで居った。今最後のひと鞭で優勝に突進することが出来ないわけでもなかった。しかしここで強いてこれを跳び越せば愛馬「久軍」を殺す外ないことを認めた少佐は，涙を呑んで棄権し直ちに馬から下りて愛護した。この有様を見た米国人はこの動物愛護の念に感激し，この事を記念するため同地に，城戸少佐と愛馬「久軍」の銅像建設の議が起ったといわれる。（以上野沢要助氏「体育理論の指導」）

幾多の国際試合に参加した我が日本選手群のはなばなしい活躍は勿論のこと，それ以上に誇りとすべきことは，随処でスポーツマンシップを発揮し，外国人に感銘を与え，特にスポ

ーツの母国英国人をして，驚嘆させ，紙上を通して，「日本国は数十名の外交官を送るよりも効果があり，彼の行動に対しては文化勲章を授与するであろう」とまで報道された清水選手の美徳はまことに立派で，永遠に我々の鑑として歴史に残ることだろう。この諸先輩の残した偉業は深く肝に銘じ，今後これが社会生活，社会行動の中において活用さるべく努めねばならぬことを痛感する。

スポーツマンシップの育成指導

スポーツマンシップの育成，指導はどのようにしたらよいだろうか。ここでは先に記載した，スポーツマンの態度（あり方）の項を底辺とし，これに考察を加えてみよう。

従来スポーツというものは，誰でもが自由に手軽に場所さえあればどこででも出来る競技で，競技者は皆スポーツマンとなり得る。しかしアマチュア精神を体得し，忠実に実行し得る真のスポーツマンになることは，なかなか容易なことではないことを察知することができるだろう。それはスポーツには「勝敗」という誘惑があるからで，この容易ならざる誘惑を打破し正道な目標に向って雄々しく前進してこそ，精神的にも，道徳的にも，教育的な効果が期待できるのである。これ等を打破するために先ずスポーツマンのあり方（態度）について充分理解と重要性を把握できる指導がなされなければならない。これが第一条件であると考える。このスポーツ精神が正しく指導され，社会生活の中に生きた行為として反映された時，品性の陶冶に，徳性の涵養に，ひいては国民性の向上にも大なる役割りを果し得る。従って指導者の責務もまた重大といわざるを得ない。万一スポーツが悪の方向に指導され，悪の道を歩んだ場合には，道義の退廃，不正，社会を汚し，不良の輩と化し，非教育的な恐るべき結果を生むことにもなりかねない。

英国においては，「児童の品性は校庭における遊戯によって養われ，紳士は運動場において養われる」と言われている。さすがはスポーツの国英国ならではと胸を打たれる。即ち児童生徒にとっては遊びの中から自然と，また一般市民は正しいスポーツを実践する場から，スポーツマンシップを堅持した紳士が養われて行くという。たしかに老若男女を問わず正しいスポーツをすることは英国人の資格であり，自負であって，そのもたらす結果は国民性を育成し，社会道徳を向上させる一方法であると考えている。従って英国においては，スポーツマンは紳士として信頼され，尊敬もされている。

また米国人も英国人に，勝るとも劣らない真のスポーツマンシップを体得している人が各層にわたって多数おり，例えば日本の商者が立派なスポーツマンである事を知った，米国の商者が，彼を信用し普通ならば恐らく不可能であると思われる難題がスムーズに解決されたという事実は，如何にスポーツマンシップが社会生活の中で尊重され，高揚されているかが伺われる。これも相互が真のスポーツマンであったからこそ実現できた美談である。

ここで大谷武一氏が，大正７年から11年にわたり在外研究員として欧米に留学され，その間とくに，「昔のアメリカのスポーツ学生」について掲載された意見を付記してみよう。

『アメリカ滞在中は多くの運動選手達と共に生活し，彼等の生活を時下に観察する機会を多くもった。また異なった方面の人々にもつとめて会い，スポーツに対するアメリカ人の感想や意見を聞いて歩いた。当時一般人の学徒スポーツに対する感想は，「学校競技そのものには，多少の異論もあり，勿論改善についての抱負もないではないが選手個人個人の生活態度としては，まことに立派で申し分がない」という点に多数の意見が一致していた。

運動選手に対する印象は，何れも明朗で，無邪気であったとの一語に尽きる。その上，彼等のコーチに対する態度は，どこまでも従順であり，日常の生活態度も極めて規則的であるとの印象をうけた。自分の行動に表裏がなく，学校の規定をよく守った。当時シカゴ大学では，対抗試合は土曜日（この日は一般に休日になっていた）に行なう慣例になっていたが，遠方の地に試合に出掛ける場合でも，前日の夜行で立って，翌朝先方に着き，その日の内に試合をすませ，直ちに夜行で帰校していた。このようにきりつめた日程での試合に対して，誰一人として不平を言う者もなく，きまりは忠実に守っていた。これを我々から見ると，少なくとも試合の前日先方に着いて，疲労を恢復し，少しでもベストコンディションで戦えばよさそうに考えたのであるが，彼等はこれらに対して当然のことを当然行っているようで，そこに少しの不自然さも感じられなかった。スポーツの重要性を認識しながらも，スポーツのために時間をとり，他教科を犠牲にすべきではないという教育方法が，当時已に学徒間によく理解徹底し，実践されていたのである。

彼等の生活の規則正しいことはまた格別で，選手室に掲げられているトレイニングルールを忠実に守って，睡眠，飲食についてもよく節制をし，酒，煙草など絶対にたしなまないように見受けられた。選手の中でだれかれの別なく，「君は煙草をふかすか，酒は？」と聞くと，だれもが一様にとんでもないという表情で異口同音に「否」と答えるのである。アメリカではどこの大学でも，少なくともA級程度の大学には，広大な地区内に広い運動場と，壮大な体育館とがあって，その地域内では，ニコチンとアルコールとは禁制になっており，これはひとり運動部の選手に対してだけでなく，一般学生についてもこの規約は適用されるのであるが，それがよく励行されていた。この聖域においては使用人もよくこの禁制を守った。これなど全く嘘のような話であるが，これがなんと30年もの昔に，アメリカの大学では実行されていたのである。このような清浄な雰囲気の下で学徒スポーツが運営せられるのであるから，スポーツマンに対する人気の悪いはずはない。事実，スポーツ学生は誰からも愛され，尊敬されていたが，これは決して偶然ではないと思った。

更に大谷先生の意見としては，自分が本来ならば，とっくの昔にカビが生えている筈の三昔前の思い出を語るのも，民主国家のスポーツとして，新らしく発足する我が日本のスポーツ界の新人諸君に，これが幾らかでも参考になればとの老婆心からの思いつきである。新らしい話も勿論必要だが，30年もの昔において，外国ではすでに学徒スポーツが，かような域にまで達していたことを知ることによって，これではならぬとの強い反省の機縁ともなればとの意図に外ならない。そこで少なくともこの現実によって，スポーツ人には技術の修練と共に，活動の基盤となるべき健康生活の実践が大切であるということと，学徒スポーツは，常に学校教育の枠内で実践されなければならないという二つの事実を再確認してほしいと思うのである。勿論これはスポーツ学生に対する要求だけに終るべきものではなく，学校教育の在り方についても，その責任は追求されなければならないだろうし，体育に無関心な当事者に対しては，スポーツ教育を除外して，どこに本当の教育があるのか，と言わなければならない』と力説された。以上が大谷先生による昔のアメリカスポーツ学生に対する感想と意見である。

かくの如く，アメリカにおいては既に五十年もの昔から学徒スポーツが，かようなレベルまで到達し現在に至っているとすれば，実に素晴らしき限りである。一方我が国の旧来の大

学における体育のあり方は果してどうであったろうか。旧来の大学は体育には全く無関心であった。しかし学生の自由意志によって行われたスポーツが僅かに体育らしい形を示しはしたが，これらのスポーツに対する教育的管理は殆んど見ることができなかった。ところが戦後，米国教育使節団が我が国教育界に重要な助言を与え，大学にも体育が正課として登場し，人間形成の一翼を担うことになったのである。

（注）昭和21年3月5日，マッカーサー元帥の要請により，イリノイ州立大学総長，スタッダード博士を団長とする米国教育使節団が来朝し，日本の教育の現状を詳細に視察の上，貴重な報告書を作成し，教育界に重要な助言を与えた。この米国教育使節団報告書の第一章「日本の教育の目的と内容」の中に，保健教育と体育の項目が見られる。（平和国家への道，民生書院版）保健教育の項においては，「学校における保健教育が，生徒個人にも，その家庭にもすぐれた保健法を実行するように教えると共に，細菌学，生物学，一般保健法の基本と実践の教授を含むべきことは大部分の権威者の認むるところである。」「高学年に於ては栄養学，衛生学，教育学の専門家が，時代に即した教材の準備を始むべきである。」

体育の項においては，「体位向上及び保健法の教授ばかりでなく，学校はスポーツ精神と協同精神に宿っている価値を認識すべきである。」「高等専門学校及び大学においてもこのような措置がとられねばならない。」「体育施設の準備のためには優先的な考慮が払われるべきことを勧告する。」「日本は体育の分野ではもっと前進し得ると思う。その体育制度は多くの長所を持っておりこれにたずさわる人々も西欧諸国に比して劣っていない。確かに民主主義教育に有力な寄与をなし得る可能性は大きい。」

以上米国使節団報告書の助言はやがて大学の体育に大きな影響を及ぼした。（大学体育　加藤橘夫氏）

爾後，ますますスポーツの場を通して，民主的平和国家，文化国家建設のため，欧米諸国には最早や数十年の隔は免れ得ないとしても，これに追いつき追いこす覚悟で，より一層の努力と当事者自らの責任において，真剣に取り組んで行かねばならぬことを痛感する。しかし前途には幾多の厚いカベがあろうとも，あらゆる困難障害を克服してやり抜かねばならぬ重大な使命がある。

なお強調したい点は，アメリカのスポーツ学生達の禁酒，禁煙を実行している問題で，実に感動せざるを得ない羨ましいかぎりである。たしかにスポーツに精進する若者にとって大切な事は，摂生である。いかに体格が，体力が恵まれ，合理的に練習指導されたとしても，本人各自の生活が放漫であり，摂生が重んじられていなければ，到底優秀なスポーツマンとして長続きすることは不可能であろう。しかるに，米国に比べ現今の我が国の学生，青少年の実状はどうであろうか。将来の我が国を荷うべき若者達の現実の姿を眺めた時，諸外国の青少年との比較においても憂慮すべき点が多々あり，なんとか打つべき手はないものだろうかと考えるのは筆者のみであるだろうか。

スポーツ生活は精神力の生活であり，努力の生活であり，神聖なる生活でもあるといわれる如く，ただ単に身体的分野のみならず，むしろ精神的分野にこそより重きを置いた生活態度をもって行動することが必要である。そこで喫煙と飲酒について，その特質を簡記してみよう。

種目／項目	喫煙の有害作用	飲酒の有・利害作用
タバコ・酒特徴	△喫煙は百害あって一利もなし △ニコチンは劇毒である	△適量な飲酒は百薬の長 △脳のレクリエーションに効果あり（0.05%前後）
薬理作用	・交感神経系，副交感神経系の神経節を侵す。 ・汗・唾の分泌に変調を来し，心臓の自動中枢，抑制神経節，鼓舞神経節に初めは刺戟的に後には麻ヒ的に作用する ・胃腸，気管枝，膀胱，子宮等にも初めは運動が亢進するが，次には麻ヒ的に作用する。 ・運動神経の末梢はニコチンによって，無用に刺戟され，随意筋（骨骼筋）の運動麻ヒを来す。 ・運動に関係のある延髄，小脳等は殊に侵され，遂には痙れん，呼吸困難等の不快な現象を来す。 ・わずか60mgの量のニコチンを直接血管に注射すると人間は死亡する。	・アルコールは人体に対し，興奮作用があるといわれるが，真の興奮作用ではなく大脳の抑制作用が麻ヒする。 ・注意，判断，反省力等の細密な機能が減退し，精神的反応は敏速となるが，精細を欠き不確実となる。 ・精神の発揚状態を呈し，これが総ての動作言語に現われる。 ・脳血管を拡張し，脳脊髄液の分泌を促進その圧を上昇させる。 ・人体細胞の脂肪質を溶解し，原形質を破壊する。また水分を吸収する性質がある ・白血球の抗毒作用が衰え，その抵抗力が弱まる。 ・血液中のアルコール含量が 0.5パーセント以上になると昏睡状態に陥る。
慢性ニコチン・アルコール中毒作用	慢性ニコチン中毒者 心悸亢進，不整脈，心冠状動脈硬化，頭痛，メマイ，不眠，精神沈うつ，血液循環率の下降，血圧の変調，咽喉及び気道の炎症，食思不振，貧血，肝臓，腎臓の解毒能力の減退。	慢性アルコール中毒者 肝臓，腎臓は中毒により，最も栄養機能の変化を来す。 アルコールが腸から吸収され，先ず一旦収容される所は肝臓，従って濃厚なアルコールを受容して萎縮させる。 腎臓も亦尿の分泌に当って，濃厚なアルコールを受容し，その実質が硬化萎縮し，周囲には脂肪が沈着してその働きを妨げる。 心臓血管も変化を来し，所謂，脂肪心臓，血管の硬化を招く。 神経系は中枢も末梢も共に退行変性に陥る。 人体の免疫力を弱め，急性伝染病に対する抵抗力が減少する，結核に対する抵抗も弱める。 毎日飲む場合／日数をおいてのむ場合 ｝中毒作用は毎日飲む方が大きい。
共通の戒め	▲青少年の場合にはその惨禍が特に大。　▲スポーツマンにとっても禁物。 ▲早老に陥らせる。　▲共に中毒にならぬよう注意が肝要。	

以上から「酒は飲まない」「煙草は吸はない」のが最も理想であるが，なかなか止められない場合には，共に適量を嗜む程度にしたいものである。また優秀な運動家の中には，「喫煙は有害で危険で，全くばかげた習慣である。僕は決して喫煙しない」と言った，大拳闘家

タニーがあり，又「喫煙は心臓と肺を弱め全神経に悪い影響を与え，また胃を害する。およそ何れのスポーツにでも成功しようと思う者はよろしく禁煙すべきだ。煙草はスポーツえの野心家には禁物だ。」と言ったニューヨーク，アスレチッククラブの名監督ドノヴァン氏があり，共に煙草の害について戒めている。

次にスポーツマン，指導者，コーチ等に対し，お互がスポーツ社会の場において，又一般社会の中において，忠実に遵守し，育成してほしい目標を掲げ参考に供したいと思う。

スポーツマンの目標

1　公明正大に正々堂々と，朗らかにプレーをする。
2　正しい権威には従い，規則を堅く守り，反則をしない。
3　終始最善をつくし，味方のために奮闘する。
4　相手を尊敬し，迷惑やいやがらせをしない。
5　正義感を高め，正しく行動し，個人的，社会的責任を果す態度を養う。
6　スタンドプレー（観衆に向ってプレーする）は決してしない。
7　役員，指導者，主将を尊敬する。
8　自他共栄の精神を忘れない。
9　精力の善用につとめる。

勝ったときの態度

1　得意になって歓声など発しない。
2　寛大で応揚で，しかも謙遜であれ。
3　敗れた相手には同情する。
4　勝利をむやみに誇らない。
5　勝ってますますバンドを締めなおす。

負けたときの態度

1　負けた時は勝者の功績を認め，これを祝福する。
2　失望を態度に表わさない。
3　敗戦のあとを反省し，欠点を充分に矯正する。
4　敗戦の弁明をせず，捲土重来をきせ。

以上考察を加えてきた結果，我々はスポーツの社会という特定の社会の中において，即ち一般の社会生活からは離れた，理想的な社会形成に都合のよい「場」において，培われてきた社会的有用性（例えばスポーツマンシップ，フェアープレイの精神，勇気，忍耐力，忠誠，率先力，克己心，同情，協力心，遵守，精力の善用等）これらの社会的，道徳的精神のかずかずが，スポーツマンの在り方や，態度等が身をもって体得でき，これを学生生徒は教室へ，教室から学校全体へ，学校から実社会へと。また一般大衆はそれを家庭に，家庭から己の所属する職場に，会社に，職場・会社から実社会へと，個人個人がそれぞれの立場で責任をもって推進し，延いてはこれを結集して一つとなし，正しく行動として実現され得た時，そこには明朗闊達にして健全な民主社会と，高度な理想的社会が生れ，教育の真の意義が達成され，教育の一般的目標である，人格の完成に貢献することができるのである。

また近代オリンピック競技の提唱者，フランスのピエール，ド，クーベルタン男爵も言っておられる如く，「国際競技によって得られる効果はいろいろあろうが，国境や民族の相違，

或はイデオロギーの対立を越えて，共通のルールに従って公明正大に勝負の決まる競技大会が，国際間の親善，友情にもたらす効果は，現今の如く複雑化した世界状勢の中にあっては，とくに強調せらるべきであろう」と。

即ち各国の競技者がスポーツ大会を通じて国際間の親睦と友交のために貢献すること，（例えば先に記載した，英国ウインブルトン庭球大会において，我が清水善造選手のフェアープレイを発揮されたこと等）また努力することが最も近道で効果も大きく，重要である。しかしこれも，ただ単にスポーツ人のみならず，今後の国際関係にあっては，一般大衆がスポーツマンシップ，フェアープレイの精神をお互に随所随所で発揚し得るとき，世界民族の平和と幸福のため，スポーツの寄与する所甚大であるといわざるを得ない。したがってスポーツの社会「場」において育成された諸徳性は，実社会の社会的，道徳的精神の基本的な，教育と修錬をする一つの社会であるということが言えると考えるのである。

参考図書

体育学講座	日本体育指導者連盟	日本スポーツ出版協会
体育理論の指導	野沢要助	体育評論社
スポーツ医学概論	（共）斉藤一男・佐藤宏	文光堂
これからの体育	大谷武一	明星社
保健体育概論	大学体育研究サークル	山文社
大学体育講義要約	日本体育学会	体育の科学社
現代スポーツ百科事典	日本体育協会	大修館

Summary

On the Moral Effect of the Sporting World on the Actual World

Yoshimichi TAKEUCHI

The sporting world separated from the rest of the world is a model of the ideal society where humanity is fostered. And when this fostered humanity is displayed through practice, the educational effect of sports is made manifest. For that purpose leaders and sportsmen must recognize the essence of sports and must behave and educate people in such a way as to make an open and democratic society. So we can say that the sporting world is a place where the actual world is fundamentally educated in the social and moral field.